

## 平成26年10月28日参議院文教科学委員会質疑

**○松沢成文君** みんなの党の松沢成文でございます。

今日、私は、これまでこの委員会でも何度となく取り上げてきて、大臣も積極的に推進をしていただいている高校日本史の必修化、あるいは近現代史の創設の問題について幾つか大臣の考え方を確認をしていきたいというふうに思っておりますので、よろしく願いをいたします。

大上段に構えるわけではありませんが、例えば古代ではアリストテレスも、中世ではモンテスキューも、あるいは近世ではあの「文明の衝突」を書いてベストセラーになったハンチントン教授も、歴史を学ぶことの重要性、それぞれの言葉を使って私たちに説いております。例えばハンチントン教授は、歴史を学び、歴史的に醸成された文化を知ることは自己のアイデンティティーの源泉であるという名言を残しておられますね。つまり、国民として大切なことは、自国の歴史、伝統文化をしっかりと身に付けていることであると。むしろ、言葉を換えれば、しっかりと国民が歴史、伝統文化を勉強していない国や民族や文明は滅んでいくんだというようにも言っているんですね。それだけ、過去の哲人の名言から察してみても、歴史教育というのは大変重要であるというふうに私は認識をしております。

そういう中で、私は何度も、実は十年ほど前でしょうか、文科省に通って高校の日本史は必修化すべきだと歴代の文科大臣に訴え続けてまいりましたが、なかなか国の方は動いてくれませんでした。そこで、神奈川県として全国で初めて高校日本史を必修化しようということで、教育委員会ともかんかんがくがくの議論をしながら、神奈川県では、日本史A、Bと、あと神奈川の郷土史、神奈川の近現代史という四つの中から必ず一つ必修として選んで日本史を勉強するという体制をつくってきたわけなんです。

そういうことも含めて、これまでこの文教委員会でも何度となく大臣に私の考えを訴えて質問をさせていただいて、大臣も大変それを前向きに受け止めていただいて、つい先般、八月頃ですか、大臣は、高校日本史の必修化、あるいは近現代史の創設も含めて中教審に諮問をし、そして次の学習指導要領にはきちっと改訂をしていきたいという旨の発言をされたわけですね。私は本当にうれしかったです。さすが下村大臣という感想を持ちました。

さあ、そこで、まずこの高校日本史の必修化を中教審に諮問をする、これもうやられたんでしょうか。秋頃って新聞には書いてあったんですが、もう諮問をされたのか、あるいは、されていないとしたらいつ頃諮問をして、その答申をいつ頃受けて議論を進めていくのか、その辺りについてお伺いしたいと思います。

**○国務大臣（下村博文君）** 松沢委員が神奈川県知事の時、日本史を神奈川県において必修にされたということは見識だというふうに思います。国においては、今、高等学校における地理歴史科の改善などを含む学習指導要領の全面改訂について、近く中央教育審議会に諮問する予定でございます。答申の時期については、中教審における議論の状況もございしますが、平成二十八年度中をめどにいただきたいと考えております。

これは、大学入学試験の抜本改革をするに当たって、当然、高校以下、特に高校における学習指導要領全部を見直す必要があると考えておまして、入学試験だけ変えても高校以下の学習指導要領を変えなかったら新たな時代に対応する教育人材育成にはつながりませんので、そうすると、まず文部科学省として、高校における学習指導要領を何をどう変えていくかということについて中教審に諮問する、その中身をきちっと精査する必要があると考えておまして、その一つとして、日本史の位置付けあるいは近現代史の位置付けも含めてトータル的に今検討しているところでございます。

**○松沢成文君** 今大臣が最後におっしゃっていただきましたけれども、この中教審に対する諮問は、高校日本史必修化をどう制度として組み込むかということだけでなく、近現代史という新しい科目を創設するということも含めて諮問するというふうに認識してよろしいんでしょうか。

といいますのは、私も知事として高校日本史必修化を神奈川県でやったわけなんです、そのちょっと反省の中から、歴史というのを世界史と日本史というこういう分け方で、日本の場合は中学校で日本史をやってくる、高校生になったらより広い視野で世界史を必修として勉強してもらおう、日本史は地理との選択だと、こういう形になったわけですね。

ただ、やはり一番若い人たちに学んでもらいたいのは、日本が幕末、明治維新以降、近代国家をつくる過程で様々な努力をしてきた、この部分なんです、ここがなかなか学ばれていない。つまり、中学校で縄文、弥生からスタートをして、結局江戸時代ぐらいで三学期終わ

ってしまう、なかなか近現代史まで勉強できなかった。あるいは、高校では地理を取っちゃったんで日本史は取っていません。恐らく、私は、今高校を卒業した子供たちで三分の一ぐらいの生徒は、近現代史はほとんど、あるいは全く学ばないで卒業してってしまう、こういう現状にあると思うんですね。そうであれば、やはりきちっと近現代史という科目をつくって、そこに焦点を当てて、近現代史というのは日本が国際社会に扉を開いて国際政治の中で近代日本をつくってきた過程ですから、世界史と日本史が融合されているんですね。

やはり、そういう科目をつくって、きちっと若い人たちに歴史を学んでもらうということが必要だと思いますが、そういう新科目をつくるという設定も含めて中教審に諮問をするということによろしいんですか。

**○国務大臣（下村博文君）** 具体的な諮問内容については現在検討中でありまして、例えば日本学術会議の高校歴史教育に関する分科会におきまして、近現代に重点を置いた歴史基礎科目の新設にしたらどうかという提言もいただいているところでございます。また、それ以外に、与党からは、新たな教科として公共、この民主主義社会の中で、前も松沢委員が提案をされていたことがありましたが、もっと政治に直接関わっていくための動機付けとしての公共、あるいは、先ほど申し上げましたように、大学入学試験を抜本的に変えるに従って、高校における学習指導要領全体を見直す中で一つ一つの教科においても、例えば国語においても今までと同じ国語ではなくて、アクティブラーニングあるいはコミュニケーション能力、それを高めるための国語教育はどうあるべきかというようなことを全部見直した中で、新科目についてもどの新科目がよりふさわしいかということも併せて議論していきたいと思っておりますので、具体的にまだ確定しているわけではございませんが、今おっしゃったようなことも含めて、これからの二十一世紀、必要な子供たちに対する教育について取り組んでいきたいと思っております。

**○松沢成文君** 大臣おっしゃるように、必修科目をどんどん増やしていけば、それだけ教室では負担が掛かるわけですね、先生にも生徒にも。ですから、新しい必修科目を増やすとしたら、必修科目の入替えだとか、あるいは二つあった科目を統合して必修科目にするとか、こういう工夫も当然必要になってくるわけですね。そういう科目再編の中で、社会科関係の科目再編の中で、私は、是非とも近現代史という新しい科目を創設して若い人たちに教えていただきたいとい

うふうに要望しておきます。

それに関連して、実は、最近ちょっと面白い本を読んだんですが、「逆読 ニッポンの歴史」という本があって、これは中教審で委員を務めた宮崎正勝さんという方が書いた本なんですが、つまり歴史を縄文、弥生の古代から勉強するんじゃなくて、一番今、現代に近い近現代から勉強して、なぜそうなったか、江戸時代に入っていく、なぜそうなったか、戦国時代に入っていくと、こういう形で勉強した方がより歴史に興味を持てるんじゃないかという、この宮崎さんは非常に面白いメリットを三つ挙げているんです。第一に、近現代史に十分な時間を割くことができるようになる、そうですね。二つ目に、歴史を単なる暗記科目ではなく、思考科目にすることができる、なるほどなど。三つ目に、子供たちに歴史への興味を持たせることができる。つまり、縄文、弥生とか古代とか、私たちと生活様式も社会も全く違うところを覚えさせるよりも、もう私たちのおじいちゃん、ひいおじいちゃんのだ、どんな苦勞があったのか、こういう現代の社会に通じるところから過去を振り返りながら歴史勉強を進めていく、この方がよりやっぱり充実した歴史学習になるんじゃないかという提案なんですね。

こういう考え方に対して大臣はいかがお考えでしょうか。

○国務大臣（下村博文君） それは共感できる部分がやっぱりありますね。今、目の前における社会現象が現実問題として過去からの積み重ねの中で今があるわけですから、今の問題なり課題なり、あるいはプラス面がその前の時代どういうつながりで出てきたのかということは、子供たちが学習意欲を高めるためには非常に重要なことだと思います。

ただ、じゃ、今の歴史教科書を後ろの方から教えていって、本当に今のような問題、解決できるかという、教科書の構成そのものを逆に学ぶような構成にしないと、ただ後ろから学んでいっても恐らくちんぶんかんぷんでよく分からないと思いますから、相当教科書編集力といますか、問われると思います。

それ、実は私もイギリスに行ったときだと思えますけれども、そういうことをされていることを先生から聞いたことがあります、イギリスの歴史教科書というのは日本の歴史教科書の三倍ぐらいあるんですね、相当分厚いものなんですね。それは結構、先生が自由裁量でどこからどんな学び方をしてもいい、あるいは部分的に取りながらやっていくということの創意工夫の中での授業の仕方でしたけれども、今の日本のそのままの学校の教科書を現代から遡って教えるというのは、

なかなか教科書的には課題があるのではないかと思います。

**○松沢成文君** その教科書なんですけど、古代からずっと教えていくと自分たちの社会とは程遠いところから始めるわけですね。ですから、どうしても年号とその年に何が起きたか、事件とか事象ですよ、まあ、これを覚えさせるという歴史教育になりがちなんです。だから、私も中学校ぐらいでやったんでしょうか、例えば大化の改新虫五匹、六百ムシゴだから四五年かな、中臣鎌足と中大兄皇子がどうのこうのと、こういうのを覚えるんですね。いい国つくった頼朝さん、鎌倉幕府は一一九二年で、初めての武家の政権が鎌倉にできて、京都から政治の首都が移ったとか覚えさせられるわけですよ。でも、当時の社会というのはなかなか私たちの今の現状とは違うので、それでテストもどうしても年号や事象が出てくるので、暗記、一夜漬け、ほとんど歴史の面白さとか楽しさとかそういうものは身に付かずに、何か暗記させられてテストでやったと、こういう歴史で終わっちゃうんですね。

ですから、私は、今後、歴史教科書を改訂していく場合に、歴史の流れや事象を解説することも必要ですが、その時代に生きた人物、その人物に焦点を当てて、そしてその時代にどういう苦勞をしながら社会の改革をしたのか、いろんな偉業を成し遂げたということを教えていく歴史授業に変えられたらもっともっと子供たちは興味を持つと思うんですね。その人物というのは何も政治家だとか軍人を言っているんじゃないんです。もう学者であったり商人であったり農民であったり、その時代に生きて地域のために本当に貢献した、そういう人たちの生きざまを教科書で教えるようにしないと、私はなかなか中学生辺りだと歴史に対する興味というのは湧かないと思うんですが、人物の生きざまを中心に歴史を教えていく、そういう教科書を作っていくことに対しては、大臣、どうお考えでしょう。

**○国務大臣（下村博文君）** 私は、高校は群馬の高崎高校というところの田舎の高校の出身なんですけど、その高校では伝説がありまして、学校で使われている歴史の日本史の教科書は大学入学試験では通用しないということで、ある教科書を高崎からわざわざ東京まで買いに行って、学校の教科書と違うその教科書を自分で学ぶと、それはどんな参考書よりもはるかに入学試験では有利になるというのがありまして、事実そのとおりだったんですね。まあ、教科書の名前は言いませんけれども。

しかし、それはつまり大学入学試験のための勉強なんですね。ですから、今おっしゃったこともそのとおりだと思いますけれども、しか

しそれをやっていたら大学入学試験では全く意味をなさない。つまり、そんな教育が問題だということで、そもそもの大学入学試験を変えていく必要があると。

ですから、大学入学試験を変えないと今おっしゃったことも絵に描いた餅になるというふうに思いますので、大学入学試験そのものが暗記、記憶中心の受験勉強を問うのではなくて、まさにそういう過去のいろんな歴史上の人物のそういうことを通じて、どう一人一人の受験生が創造的でクリエイティブな、歴史から何を学んだのかというようなことを例えば記述式とか、あるいは別の形で入学試験そのものを工夫しないと高校の教科書も変えるというわけにはいかないのではないかと思います。

**○松沢成文君** そのとおりだと思います。その入試の件についてはちょっと今日は時間がないので送りますけれども。

最後に、近現代史を学ぶとなったらこれから近現代史の教科書をまた作っていかなければいけない、そのために検定をしていかなければいけないわけですね。

ただ、近現代史というのは、いわゆる過去の大战に絡む歴史認識の問題があって、非常に教科書を作るのには難しいです。ただ、私は今までの近現代史の教科書を見てきて、どうしても、過去の大战で日本は近隣諸国に被害を与えた、こんなに悪いことをした、だから反省しながら生きなければいけないという自虐史観に基づいた教科書が多いように思えてならなかったんです。近現代史を創設しても、そういう自虐的な歴史ばかり教えていて、何か日本の若い子がみんな日本は悪いことをしたから謝りながら生きなきゃいけないんだとなったら、これは歴史教育の私意味がないと思うんですね。もっと歴史に光を当てて、日本は確かにいろんな戦争もあったけれども、みんなで努力してこれだけの近代国家をつくってきたんだという部分に光を当てた教科書にしていかなきゃいけないと思っています。

今後の近現代史の歴史教科書の在り方については、大臣はいかがお考えでしょうか。

**○国務大臣（下村博文君）** 全くおっしゃるとおりだと思います。最近、ニューヨークタイムズに、安倍政権の教育改革は片っ方でグローバル教育をしながら片っ方で愛国教育をしているという批判がありましたが、これは全く当たらないというふうに思っておりまして、日本人としてのアイデンティティー教育、歴史や伝統や文化をきちっと教えるということは、これは右傾化とか国家主義的な愛国教育とかそう

いうジャンルでは全くないわけでございまして、歴史においても我が国は自虐史観的なやっぱり部分が多かったのではないかというふうに私も思っております。

歴史は影の部分だけではなくて光の部分もやっぱりありますから、学ぶことによって子供たちが日本に対して誇りやあるいは伝統に対する敬意、祖先の歩みに対してですね、素直にそれに対して受け止めると、そういう部分も必要だと思います。もちろん、光だけ全て書けということではなくて、影と光、バランスよく教えることによってバランスの取れた歴史観を伝えていくということは当然必要なことだと思います。

○委員長（水落敏栄君） 時間が過ぎております。

○松沢成文君 どうもありがとうございました。